宮城で新しい暮らし、みつけた

みやぎの地域おこし協力隊

興味がわいたら

みやぎの地域おこし協力隊ことはじめ

宮城県内では随時、市町村から地域おこし協力隊の募集があります。
みなさんのチカラを待っている場所がたくさんありますので、ぜひ隊員として宮城県へおこしください！

STEP 1　募集情報を確認
募集・情報サイト「みやぎ移住ガイド」から協力隊募集の情報を確認してください。

→

STEP 2　お問い合わせ・お申込み
不明点や詳細はお問い合わせの上、募集している自治体へご応募ください。

↓

STEP 3　選考・採用
自治体による選考（書類選考、面接など）の結果、採用が決定します。各自治体の委嘱により「地域おこし協力隊」として任命されます。

←

STEP 4　住民票を異動
現住所から採用先の自治体へ住民票を異動し、住居を確保のうえ、地域おこし協力隊の活動を開始させます。

↓

地域おこし協力隊として活動をスタート

こんな活動があります

- ○農林水産業の振興
- ○地域行事やイベントの応援
- ○特産品の製造・販売
- ○地域ブランドの開発・プロモーション
- ○移住・定住支援
- ○小さな拠点づくり推進
- ○外国人誘客のための観光振興支援
- ○商店街活性化

MIKKE 情報はこちらをCHECK

宮城県の移住情報誌

ちょうどいい、宮城県

みやぎの暮らしや、移住された方々のインタビューなどを掲載しています。

移住定住支援ハンドブック

35市町村の詳細なデータ、各種支援内容などを紹介しています。お試し移住情報もあり、宮城県への移住を検討するために必要な情報が満載です。

みやぎ移住ガイド

宮城県への移住を検討されている方々向けの専用サイト。地域おこし協力隊の募集に関する最新情報なども掲載しています。

https://miyagi-ijuguide.jp/

発　行　宮城県震災復興・企画部 地域復興支援課　TEL.022-211-2423　MAIL.tisin@pref.miyagi.lg.jp

発行年月（平成30年3月）

もくじ

— 各地で活躍中！みやぎの地域おこし協力隊 …… 3

— 隊員インタビュー

「地元に伝わる歴史と風土を手仕事に込めて届ける」　登米市/鈴木景子さん …… 5

「学芸員ならではの視点で“生きた”歴史を掘り起こす」　栗原市/鍋嶋貴之さん 大杉要さん …… 7

「陶芸のスキルを活かしてこの町に新しい光を当てる」　七ヶ宿町/水谷真人さん …… 9

「地域に新しい風を取り入れ町と人とのつなぎ役に」　丸森町/高瀬絵梨香さん …… 11

「海と山と里の美味しさが詰まったワインを夢見て」　南三陸町/藤田岳さん …… 13

— 地域が変わった！助かった！住民座談会

「東松島自慢の“いいもの”が若いアイディアで羽ばたく」　東松島市 …… 15

「地域に自然に溶け込んでまちの魅力を掘り下げる」　加美町 …… 17

— 興味がわいたら みやぎの地域おこし協力隊ことはじめ …… 裏表紙

『おこす』は『みつける』からはじまる。

地域おこしの第一歩は、
地域の魅力をみつけて、興味をもつこと。
それを守る手段や、つないでいく仕組みや、
発信する方法を考えて、地域の宝にしていくことです。

その活動は、地域をおこすことはもちろん、
あなた自身を「起こす」ような、
あたらしい自分をみつけることにもつながります。

地域を活性化させるために、地域資源をつないでいくために、
自分自身をより輝かせるために。

あなたが「みつける」ものは
元気な未来をつくっていく種となります。

「地域おこし協力隊」とは

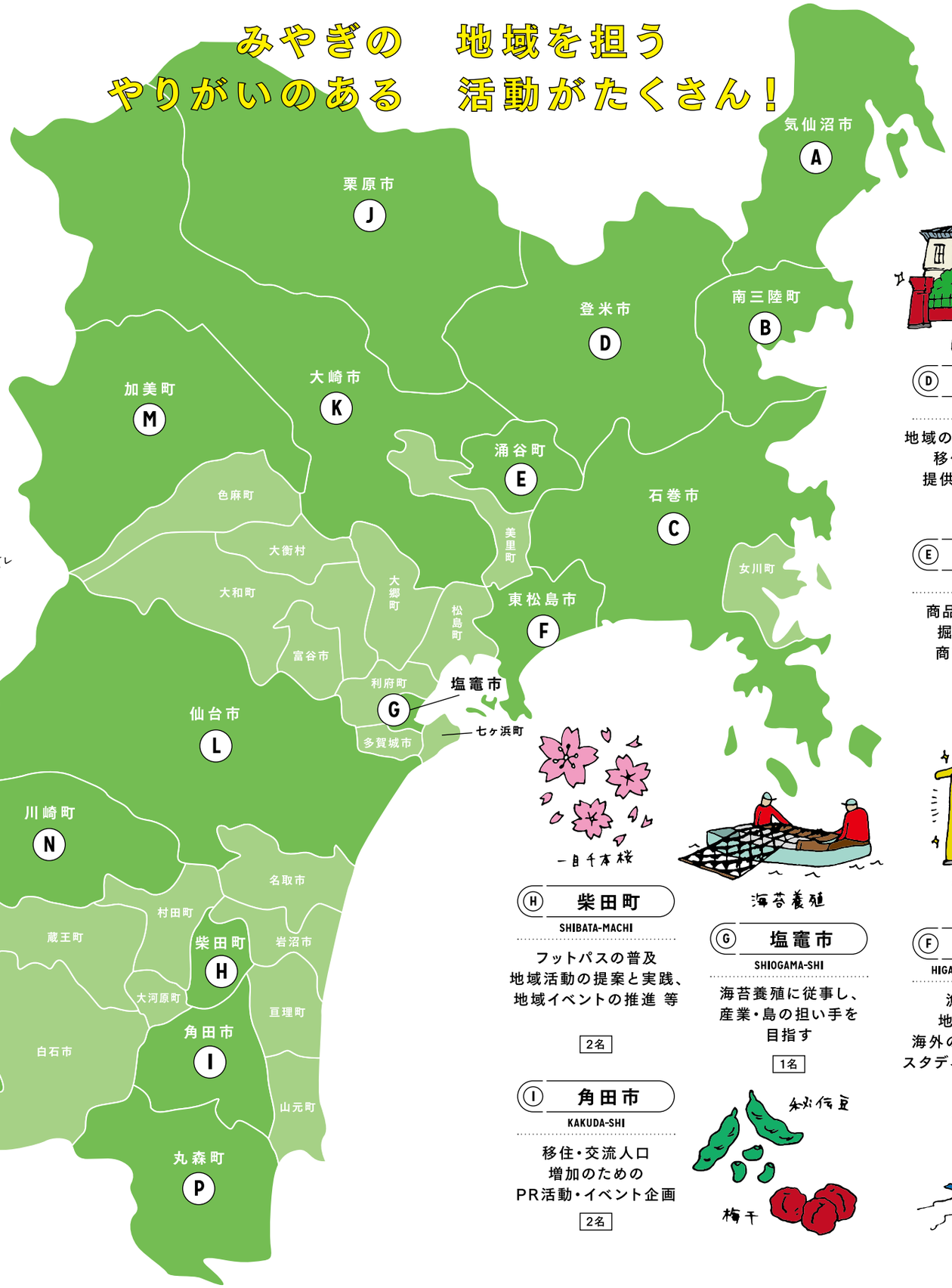
人口減少や高齢化等の進行が著しい地域において、都市部の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、地域力の向上及びその地域への定住・定着を目指す取組です。

みやぎの　地域を担う
やりがいのある　活動がたくさん！

総計
76名

各地で活躍中！
みやぎの地域おこし協力隊

平成30年1月1日現在



Ⓜ 加美町
KAMI-MACHI

音楽のまちづくりで
町民が元気に
…音楽の振興
農＝人＝自然＝景観
＝暮らし
…農業の振興 等

8名

Ⓝ 川崎町
KAWASAKI-MACHI

みやぎ川崎
コワーキングビレッジ
「SPRING」にて
起業・移住定住支援

2名

Ⓞ 七ヶ宿町
SHICHIKASHUKU-MACHI

芸術振興（陶芸）業務

1名

Ⓟ 丸森町
MARUMORI-MACHI

地域資源を発掘し、
「地域の教科書」作成
交流人口拡大のため、
都市×若者×田舎の
コーディネート活動 等

8名

Ⓙ 栗原市
KURIHARA-SHI

ジオパーク推進業務
栗駒地区
「六日町通り商店街
シャッター開ける人！」等

11名

Ⓚ 大崎市
OOSAKI-SHI

鳴子漆器の技術習得
旅行商品の企画・販売
支援、観光物産ＰＲ

3名

Ⓛ 仙台市
SENDAI-SHI

農業、地域行事、集落
の活性化に係る活動

2名

Ⓗ 柴田町
SHIBATA-MACHI

フットパスの普及
地域活動の提案と実践、
地域イベントの推進 等

2名

Ⓘ 角田市
KAKUDA-SHI

移住・交流人口
増加のための
PR活動・イベント企画

2名

Ⓖ 塩竈市
SHIOGAMA-SHI

海苔養殖に従事し、
産業・島の担い手を
目指す

1名

Ⓓ 登米市
TOME-SHI

地域の魅力の発掘・発信
移住体験機会の
提供や移住相談 等

4名

Ⓔ 涌谷町
WAKUYA-CHOU

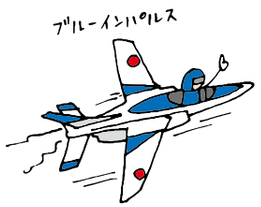
商品開発や魅力の
掘り起こし活動
商工業者等との
連携活動

2名

Ⓕ 東松島市
HIGASHIMATSUSHIMA-SHI

漁業・農業や
地区再生活動、
海外の方を対象とした
スタディツアーの企画 等

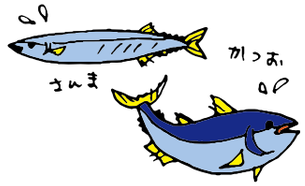
13名



Ⓐ 気仙沼市
KESENNUMA-SHI

観光DMOに関する活動
地域資源を活用した
新産業・特産品創出事業 等

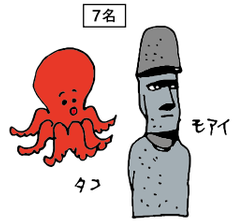
9名



Ⓑ 南三陸町
MINAMISANRIKU-CHOU

水産資源を活用した
缶詰商品の開発
資源循環型を感じられる
レストランの事業化 等

7名



Ⓒ 石巻市
ISHINOMAKI-SHI

復興支援の寄付車を
活用した
レンタカー事業

1名

※宮城県内では随時市町村から地域おこし協力隊の募集があります。
最新の募集情報は「みやぎ移住ガイド」をご覧ください。

隊員
インタビュー
interview

登米市

鈴木景子さん

地元に伝わる歴史と風土を手仕事に込めて届ける

静岡県出身の鈴木景子さんが初めて登米市を訪れたのは、東日本大震災のボランティアがきっかけだ。「米川地区にある廃校を拠点にボランティア活動をしていたのですが、何度見てもこの里山の景色は素晴らしいなと思いましたね。都会育ちで田舎に憧れもあったので、いつもこの景色を眺めては、ほっとしていました」。そしてその後、ボランティアを快く迎え入れてくれた地域の方との交流が広がり、この地区の会長から「やってみないか」と声をかけられたことで地域おこし協力隊としての活動をスタートさせる。かつてはOLとして働き、忙しい日々を過ごしていたという鈴木さん。いわゆる〝田舎〟での暮らしで、生活スタイルも考え方も大きく変わったのだそうだ。「昔はピシッと仕事をしていたんですけど、こちらに来てからは自由奔放にのびのびとやらせてもらっています。きっと、今のほうが自分の〝地〟が出ているんじゃないかな（笑）。こちらの方はみんなフレンドリーだし、すごく親しみやすい。個性的な方が多いのもおもしろいですね」。

鈴木さんの仕事は、農業体験の開催や大学生とのコラボ事業の企画運営、地域行事への協力など多岐にわたるが、なかでも大きく力を入れているのが「草木染め」と「刺し子」だ。この地域で採れた杉や桑の葉などで染物を作るだけではなく、さらにその美しい色合いの布や糸を使って刺し子の小物を作っている。「自然豊かな米川の地域資源を活かしたものづくりを考えていたときに、友人から草木染めを教えてもらったんです。昔からものづくりに関わりたいと思っていましたし、東北に古くからある手仕事を伝えられることがうれしいですね。米川には江戸時代に仙台藩の兵具方職人として染物を行っていた家があり、秘伝のアカネ染の手法が伝わっています。今後はそのやり方も復活させてみたいです」。現在は月に一度、地区内で気の合った仲間とともに草木染めや刺し子のワークショップも行っているが、これからは商品化に向けて活動を続けたいとさらなる夢も語ってくれた。

現在、鈴木さんが暮らしているのは、地域の方が快く貸してくれた古民家。愛犬のゲンくんとともに、地域おこし協力隊としての日々を紡いでいる。凍み餅を作ったり、金継ぎを楽しんだり、アカネ染の毛糸で編み物をしたり…。余暇には何かを作ることに時間を注ぐことが多いのだそうだ。「藁細工でお正月飾りを作ったり、味噌や甘酒などの発酵食品、それから畑で育てた野菜を干したり漬けたりして保存食作りにはまっています」。

様々な活動を通して人のつながりもでき、今後はこの家を拠点に活動をしていきたいと考えているそう。「大家さんは陶芸や古物収集が好きな方で、何かと助けてもらっています。ここを使って展示会やものづくりのイベントを企画したいという話をしたところ、快く受け入れてくださいました。広い家なので、コミュニティカフェやシェアアトリエ、私設の図書室のようにして、誰でもふらっと訪れることができる場所にしていきたいと思っています」。と笑顔で楽しそうに語る姿が印象的だった。

MIKKE
人の
ミリョクを
みっけ！

米川地区に伝わる伝統行事「米川の水かぶり」。地域おこし協力隊の仕事として、地元の方とともにPR用の人形を作った。

登米市東和町にある不動産会社「まちおもい」を会場に月に1回程度行っている刺し子ワークショップ。作業の合間に賑やかな声が響く。

手づくりの温もりが
伝わる作品たち！

MIKKE
地域の
ミリョクを
みっけ！

アカネ染を施した布は、光の加減によってサーモンピンクやオレンジ色のような美しい色合いに。杉の葉でもきれいなピンク色に染まるそう。

軒先に餅を吊るし、乾燥させることで作る「凍み餅」。寒い地域ならではの気候を活かした作り方。「干し野菜を作ることもありますよ」

きれいな
オレンジ色！

毛糸にアカネ染をすると、ほんのりとしたオレンジ色に。「アカネの種類によって色合いも変わるんですよ」

MIKKE
新しい
自分を
みっけ！

静岡にいた頃から弾いていた「カンカラ三線」。「すべて独学で覚えました。まだまだ下手ですけど、酔ったときに披露することもあります（笑）」

昨年から飼い始めた愛犬のゲンくん。「犬を飼い始めてからいろんな趣味が中断してますけどね。本当にかわいい存在です」

PROFILE

鈴木景子さん
出身地：静岡県
活動地域：登米市
活動開始年月：平成28年4月

輸出入品を扱う会社を退職後、東日本大震災のボランティアをきっかけに登米市を訪れ、その後移住。この地域の魅力のひとつを「きれいな星空が見えること」と語る。

隊員インタビュー
interview

栗原市 鍋嶋貴之さん 大杉要さん
学芸員ならではの視点で"生きた"歴史を掘り起こす

栗原に暮らす人々の生活の足として、長く愛されてきた「くりでん」こと「くりはら田園鉄道」。宮城県最後の私鉄でもあったくりでんが、惜しまれつつも廃線となったのは平成19年のこと。その後くりでんの貴重な歩みを伝えるためオープンした、くりはら田園鉄道公園内のくりでんミュージアムで活躍しているのが、鍋嶋さんと大杉さんの二人だ。

「ガイドとして来館者にミュージアム内を案内したり、みなさんに興味を持ってもらえるようなイベントを企画したり。少しでもいろいろな方々にここに足を運んでもらい、くりでんの歴史を身近に感じてもらうことがわたしたちの仕事です」。

営業当時の状態で展示された古い機関車や客車、実際に使われていた車輌の運転席で運転シミュレーションができるコーナーなど、来館者を楽しませるたくさんの工夫に溢れたくりでんミュージアム。その中でも、特にカラフルな可愛らしい一角に目が留まった。

「これは地元の小・中学生が描いてくれた、くりでんの絵画展です。くりでんに乗ったことのない子供たちにも、くりでんの魅力を知ってもらえるきっかけになればと企画しました。自分で市内の学校を回りながら、呼び掛けて描いてもらったんですよ」と話してくれたのは大杉さん。司書として図書館で働いていたが、学芸員の資格を活かしたいと、平成29年に地域おこし協力隊に参加した。

一方、鍋嶋さんが栗原にやってきたのは、その1年前。東京の大学で日本史を専攻していた時に先生に紹介され、卒業と同時に着任した。くりでんミュージアムのオープンにあたってはOBの方々から聞き取り調査を行い、そこで得た貴重なエピソードを展示物に生かす作業も行ったそう。「ミュージアムの周知と並行して僕たちの大切な仕事は、くりでんの生きた歴史を掘り起こすこと。赴任した当時、段ボール1400箱もの膨大な資料が手つかずの状態で保管されていて、まるで宝箱のようだと思いました(笑)」。

学芸員の資格を持つ二人ならではの視点で、埋もれているくりでんの歴史を蘇らせ、分かりやすい形で来場者に伝える仕事が期待されている。「みなさんにお見せしたい資料は山ほどあります。今ひそかに温めているアイディアは、小荷物切符の企画展。昔の電車は宅配便の役割も担っていて、個人荷物の運搬もしていました。その切符から、何を送り合っていたのか当時の人々の生活が垣間見えるんです。そんなふうに、くりでんが人々の暮らしに密着していた証を面白く伝えていきたい」。

県外からやってきた二人にとって、おじいちゃん世代であるくりでんOBとの交流は心あたたまるひととき。「展示車両の敷設のため60kgもする枕木を力を合わせて運んだり、イベントのために手取り足取りで運転技術を教えてもらったり、思い出は尽きないですね。みなさんの想いと記憶を、次の世代に繋げるお手伝いができたらいいなと思います」。

MIKKE 人のミリョクをみっけ！

電鉄に関する知識はもちろん、ちょっとした業務エピソードまで様々なことを教えてくれるくりでんOBの方々。

大杉さんが企画担当した、地域の子供たちが描くくりでん絵画展。見るとこちらが元気をもらえるような作品ばかり。

MIKKE 地域のミリョクをみっけ！

栗原の伝統食である餅料理は50種類以上あるといわれている。エゴマを炒った「じゅうね餅」、沼えびを茹でた「えび餅」など個性的なものも。

渡り鳥の越冬地として全国的に有名な伊豆沼。特にマガンの幻想的な早朝の飛び立ちは一見の価値あり。夏の蓮祭りも素敵です。

通気性と保温性に優れ、野良着に重宝されてきた栗原自慢の綿織物・若柳地織。大杉さんの通勤途中に織場があるそうです。

MIKKE 新しい自分をみっけ！

誰かに何かを教えたり説明する経験がなかったという鍋嶋さんですが、今では率先して来館者に対してガイド役を買って出ています。

グッズコーナーにあるガチャを回すと出てくるのは、大杉さん撮影の写真で製作されたくりでんバッヂ。カメラマンデビュー！？

PROFILE

鍋嶋貴之さん
出身地：北海道　活動地域：栗原市
活動開始年月：平成28年6月
大学では日本史を専攻。卒業後に着任。乗車会で走る気動車と若柳の田園風景とのコントラストがお気に入り。

大杉要さん
出身地：神奈川県　活動地域：栗原市
活動開始年月：平成29年4月
司書勤務を経て、生まれ育った神奈川県から栗原へ移住し、初めての一人暮らしを満喫中。ぜんまい料理にハマっています。

隊員
インタビュー
interview

七ヶ宿町

水谷真人さん

陶芸のスキルを活かしてこの町に新しい光を当てる

陶芸家として活躍しながら、七ヶ宿町の地域おこし協力隊としても活動する水谷真人さん。山形の大学で陶芸を学んだその腕は今、町のこれからを支えようとしている。

「僕をこの仕事に誘ってくれた『無限の会』という陶芸クラブを主催している氏家さんが、”七ケ宿焼き“という焼き物を生み出そうとしているんです。僕の今の仕事は、その方のサポートをすることです。この焼き物の特徴は、陶芸に使う土や火を炊く薪、窯に使われている石まで、地元にある資源で作られているということ。すべて地元の素材で焼き物が作れるなんてとても珍しいことですし、本当に貴重な体験をさせてもらっていると思います」。来年度からはその焼き物を発信する場として、『無限陶房』という会社を立ち上げる。「作品を作るだけではなくて、経営の方法とか、どうしたら陶芸をちゃんと仕事にできるのかということも勉強していきたいですね。今は0からのスタートでバタバタすることもありますが、それも含めて自分のなかで大きな経験になっています。これから何ができるかいろいろと模索していきたいです」と楽しそうに語る姿がとても印象的だ。さらに、陶芸に対する想いや理解も深まっているという。「学生の頃、”その土地で採れた土で焼き物を作ると違いが出る“と聞いたことがあるんです。その時はどういう意味かわからなかったんですけど、ここに来て、その意味が実感できるようになっています」。

仙台市街地で育った水谷さんは「最初は車がないと動けない田舎の生活に苦労しましたね」と苦笑いを見せるが、今ではいろんな人の輪の中で豊かな毎日を過ごしている。時に「陶芸コース」がある町内の高校で仕事をすることも多いが、校長先生は「この前、水谷さんが地域の行事に参加しているのを見かけたんですよ。みんなに溶け込んで頑張っているなと嬉しく思いましたね。地域のみんなにも可愛がってもらっているのが伝わります。そうそう、生徒からもすごく親しまれているんですよ。もうすでに地域の一員なんだなと思いました」と水谷さんの人柄を笑顔で語る。また、水谷さんの師匠のような存在である氏家さんも「今まで七ヶ宿焼きを広めるためにいろいろと動いてはいたのですが、なかなかうまくいかなくて…。でも、陶芸でやりたいことがある頼れる存在が来てくれたおかげで、これからは本格的にこの焼き物を活用した町おこしに取り組めそうです」と頼もしく思っている様子。水谷さんの和やかな人柄が、すでに地域の方に受け入れられているようだ。「僕をサポートしてくれるみなさんがいてくれること、そしてみなさんが僕の面倒を見てくれることが、今ここで過ごせている理由かと思います。本当に助かっています。やっぱり、大切なのは人との繋がりですよね」。

地域にあたたかく見守られる中で、自分が持つ腕を活かしながら仕事に励む水谷さん。これからは、七ヶ宿町の財産になるであろう作品と、町の未来を作り出す今以上に大きな存在になってくれるはずだ。

陶芸の師匠
氏家さんには
頭が上がりません！

直接指導する機会は少ないものの、生徒たちから慕われている水谷さんの周りはいつも賑やか！生徒だけでなく教員からの信頼も厚い。

MIKKE
人の
ミリョクを
みっけ！

高校には「陶芸コース」があり、生徒たちが作品づくりに励む。水谷さんの人柄か、選択授業では陶芸を希望する生徒の数が増えているのだという。

MIKKE
地域の
ミリョクを
みっけ！

水谷さんが陶芸を通してサポートしている高校の敷地内には、大規模な電気窯がある。ここには陶芸家にとって充分な環境が整っている。

冬季は雪深くなる七ヶ宿町。しかしこの雪の下からは、“七ケ宿焼き”に使われる質が高い土が多く採れる。

樹液や樹脂が豊富でよく燃えることから、窯の火入れに重宝されるアカマツ。陶芸に最適な自然環境も、水谷さんがこの町に惚れ込む理由のひとつだ。

すばらしい環境で
陶芸ができる！

MIKKE
新しい
自分を
みっけ！

素朴でモダン。そしてあたたかみが伝わる作品を作る水谷さんは、個展を行うなど積極的に創作活動を行う。

自作した土鍋でお米を炊き、好きな形に作り上げたティーポットでお茶を飲むのが日課。自分で作る器で食事をいただく豊かな毎日を送っている。

PROFILE

水谷真人さん
出身地：仙台市
活動地域：七ヶ宿町
活動開始年月：平成29年4月

仙台市出身。一度県内の大学へ入学したものの、「手に職をつけたい」と山形の美術大学に進み陶芸を学ぶ。2015 年には第 40 回記念東北現代工芸賞を受賞。個展なども行っている。

隊員
インタビュー
interview

丸森町 高瀬絵梨香さん
地域に新しい風を取り入れ町と人とのつなぎ役に

宮城と福島の県境に位置する丸森町。この町で地域おこし協力隊として活躍する高瀬絵梨香さんは、週に4日は移住の相談を受け付ける移住サポートセンターで、残り1日は町内にある人気のジェラート屋で副店長として働いている。「移住サポートセンターでは移住希望者からの相談だけでなく、移住者と住民とのつなぎ役や空き家の相談を引き受けています。町内の空き家をこれからどう活用しようかと考えることも多いです」。それは、単に"空き家をなくそう"という話ではない。その家に住んでいた人の背景や歴史までも大事にしながら、次の住み手を気持ちよく迎え入れるために手入れをしていくのだという。「この家に住んでいた方の人生のエピソードとか家の背景にあるストーリーを丸ごと聞いたうえで、これからどうしていこうか、というお話をしています。移住相談も一緒で、単に引越しをしたいという理由だけでなく、どうして移住したいのか、移住してからどんなことがやりたいのかを聞くようにしているんです。その方が持っている背景をきちんと聞いたうえで、これからの話をしていくことを大切にしています」。

昨年開催した「丸森ローカルベンチャーツアー」。大学生を対象に、町内の家庭に宿泊し丸森町で働くことや暮らすことを実体験してもらった。「ただ何かを見て誰かの話を聞いたりするだけだと、地域との繋がりを作れない。それならもっと密な繋がりを作りたいなと思ってこのツアーを企画したんです」。住民にとっては自分たちが住む町の魅力を伝える最良の機会。また、参加した学生にとっても人々とのふれあいの中で町の魅力を発見できたといい、そこから次につながるいい連鎖が生まれているという。「この地域は、もともと外から来た方を受け入れるのにすごく寛容な人が多いんです。このツアーで楽しそうにしている住民の方を見て、改めてそんな人柄を感じられる機会になりましたし、これからまた何ができるかなといろいろ夢が膨らんできますね。私はこの地域の人たちを主役にしたいんです。これからもその機会をどんどん作っていきたいですね」。

この町に住んで約2年。それまでは数字を追いかける営業マンとして活躍したが、「今の仕事は充実感がまったく違う」と笑顔を見せる高瀬さん。丸森町のためにできることを考え、0から1を作りだすという難しい仕事だが、町内の方々の人の繋がりに助けられながら円滑に仕事を進められているのだという。伸びやかな環境の中で、仕事に対する考え方もガラッと変わった。「昔は成果を出すことにやりがいを感じていたけど、この町に来てからは自分の成果以上に、誰かの成果がうれしいんです。この人が活かされるためには私に何ができるかな、なんて考えるようにもなりました。これからは外の人がこの町に来たときに地域の人と気軽に交流ができる方法だとか、町の外からもこの場所と関われる仕組みを作っていきたいです」

MIKKE
人の
ミリョクを
みっけ！

移住定住の
ヒントがいっぱい！

センターの壁に貼られた付箋。ここには町民一人ひとりが思い描く「こんな丸森町にしたい！」という熱いコメントが書かれている。

「移住サポートセンター」では、移住に関するさまざまな相談や悩みに対応。「地域と移住したい方のつなぎ役をしています」

MIKKE
地域の
ミリョクを
みっけ！

週に1度、人気のイタリアンジェラート店「GELATERIA LA FESTA（ジェラッテリア ラ フェスタ）」で副店長を務める高瀬さん。

観光施設「齋理屋敷」に隣接したジェラート店は2017年7月オープン。早くも幅広い世代が訪れる人気のスポットになっている。

スーパーでは買えない
特別ないちごを使用！

牛乳やブルーベリーのほか、ずんだやエゴマなど丸森町産の素材で作ったジェラートが種類豊富に並ぶ。
（写真はいちご。シングル380円）

MIKKE
新しい
自分を
みっけ！

おすそ分けしてもらった渋柿を、自宅のベランダで干し柿に。「50個もいただいたんです（笑）。そのうちの10個で作ってみました」

高瀬さんが住むのは、町内にあるマンションタイプの住まい。快適な住環境がお気に入りだという。

PROFILE

高瀬絵梨香さん
出身地：秋田県
活動地域：丸森町
活動開始年月：平成28年7月

大手企業で活躍後、転職を機に丸森町へ移住。新しい働き方を模索するなかで、ジェラート屋と地域おこし協力隊という二足の草鞋を履くことに。地域を観光で盛り上げることが好き。

隊員
インタビュー
interview

南三陸町 藤田岳さん
海と山と里の美味しさが詰まったワインを夢見て

太平洋に面し、リアス式海岸を有する南三陸町。その名前を耳にして、「海とともに生きる漁業の町」というイメージを思い浮かべる人も多いだろう。でも藤田さんの仕事場は、見晴らしの良い山の中腹。「南三陸ワインプロジェクト」のメンバーとして、この50アールほどの土地でワインの原料となる葡萄の木約800本を育てている。

「苗木を植えて、夏はツタを切りながら虫がつかないように目を配り、冬には剪定をして……葡萄の実がなるまでに3年。長期戦です」。まだ初々しい若木を撫でながら説明してくれる藤田さんだが、もともとは水圏環境教育学が専門。学生時代は海に関する研究に没頭し、卒業後に震災で被災したネイチャーセンターの復興サポートのため南三陸町を訪れたという。そう、初めにこの町と藤田さんを繋いだきっかけは海だった。

「この町にしばらく身を置くうちに、海だけでなく、山、川、里、そういった多様な環境に恵まれている場所だと気づいたんです。四季を通して山や畑が蓄えた滋味が川に流れ込み、海で育つ魚介類の養分に繋がっている。その循環の内側に里の人間の暮らしがあるんですね。だから農業を始めることは、僕の中でとても自然なことでした」といっても、農業はまったくの門外漢。この道40年のベテラン「南三陸農工房」の社長さんやパートの方々をはじめとする地域の人々に、道具の名前から鍬の振り方、作物に応じた肥料のやり方のコツまで、農作業のイロハを教わった。はじめて自分の手でつくった長ネギやトマトは、まるで我が子のようなもの。「それまで体を動かす仕事をしたことがなかったので、毎日がとても新鮮です。同じ8時間でも、土に向かって作業する時間の中身がとても濃く感じられるんですよね。心も体も健やかになったせいか、昔からの友達に〝顔つきが変わったね〟なんて言われたりも(笑)」。

葡萄の初収穫は来年を予定している。その果実を手に入れたら、醸造を学んでいる仲間といよいよワインづくりがスタート。でも藤田さんのゴールは、単なる美味しいワインづくりにとどまらない。「ワインを通じて、この町にインパクトを起こしたいんです。たとえば、南三陸は牡蠣が特産ですが、この土地でつくられたワインと一緒に楽しめたら人を惹きつける観光資源になるんじゃないかな。アヒージョやカルパッチョなど、ワインに合う海の料理はたくさんある。ワインをキーワードに、そうした南三陸町ならではの新しい食文化をつくっていけたら。ワインには、この町を取りまく産業を引っ張っていく可能性が秘められていると思うんです」。

地域おこし協力隊の期間は3年。任務を終えたら、ワインづくりで起業したいと考えている。地道な仕事の先に見つけた、藤田さんなりの社会貢献のカタチ。南三陸の豊かな自然と藤田さんの夢が、一杯のワイングラスに注がれる日が今から待ち遠しい。

MIKKE
人の
ミリョクを
みっけ！

農業の師匠、
専業農家40年の
阿部さんと

地元の同世代の仲間と集う機会も多い。「この町に来てから友達が増えました。SNS のフォロワーさんは 1000 人ぐらい」

地元の農家さんに教わり、自分の田んぼづくりも挑戦！

MIKKE
地域の
ミリョクを
みっけ！

ワイン畑の脇に生えているシンボルツリー。2本のケヤキが寄り添っているように見えるけれど、実は根本が一緒という不思議な木。

南三陸町の「さんさん商店街」で開催された夏の盆踊り大会。ミュージシャンでもある藤田さんは和太鼓を担当。腕前は秘密。

国際認証取得の
戸倉のカキ

自然資源の保護と環境への取り組みが評価され、日本で初めてASC 認証を受けた南三陸の牡蠣。もちろん美味しさだってお墨付き！

MIKKE
新しい
自分を
みっけ！

藤田さんが暮らすのは、築80年の広い古民家。広い庭の一角には古い土蔵や、DIY の作業場にしている木組みの小屋も。

庭に自生しているリンゴや杉の木の皮を使って草木染めに挑戦。「意外な色が出て面白い。地元の仲間と草木染め部を結成しました」

PROFILE

藤田岳さん
出身地：埼玉県
活動地域：南三陸町
活動開始年月：平成28年5月

大学卒業後、被災した南三陸町内の水産関連施設の復旧事業などに関わり、その後、4年間のNPO 活動を経て地域おこし協力隊へ参加。趣味は音楽で、シンガーソングライターの顔も持つ。

佐藤農園
佐藤祥さん

地域おこし協力隊
伊藤克哉さん

佐藤農園
今関裕己さん

地域おこし協力隊
渡辺華奏未さん

佐藤農園
佐藤みつえさん

地域おこし協力隊
鳥羽友紀さん

地域が変わった！
助かった！

住民座談会

東松島市の場合

東松島ならではの滋味豊かな農作物。いいものをつくって、その美味しさをもっと多くの人に知ってもらいたい。地元の農家・佐藤農園のそんな想いと、「食」「インターネットマーケティング」「人が集まること」に関心を持つ４人の協力隊員が出会いました。お互いの可能性を持ち寄って、東松島の新しい明日を模索しています。

東松島自慢の"いいもの"が若いアイディアで羽ばたく

佐藤祥　渡辺さんと鳥羽さん、平山さん（本日欠席）がうちに研修に来てくれたんだよね。包丁を使ってちぢみホウレンソウを収穫して、軒下に運んで袋詰めをして集荷場へ運搬して…。

佐藤みつえ　あっという間の2週間だったね。

鳥羽　雪が降る日も結構あって、寒さが大変でした（笑）。家で米をちょっと作ったりはしていたんですが、本格的な農家で作業するのは初めてで分からないことばかりで。

渡辺　ご馳走になったホウレンソウのおひたしがすごく美味しかったよね。上に海苔が載っていて、そういう食べ方は初めてだったので新鮮でした。

佐藤みつえ　あれは東松島でとれた海苔だよ。ホウレンソウを一番おいしく食べられる簡単なお料理。ただ茹でて刻んで海苔をかけるだけなんだけどね。

佐藤祥　研修の最後には、佐藤農園の看板も手作りしてもらいました。協力隊の人がここに来るのに場所がよくわからなかったということを聞いて、目印代わりとみんなの記念も兼ねて（笑）。

伊藤　佐藤農園でつくっているデンマーク王室献上米の宣伝にもなっていますよね。稲のイラストも描いてあってカラフルで分かりやすいですし。

鳥羽　でも、本物の稲見たことないでしょ？って言われましたよ（笑）。

佐藤祥　いやいやでも友紀ちゃんは、うちのネギを使って「ひがまつドッグ」のネギ味噌をつくってくれたじゃない。

伊藤　マルシェイベントの時ですね。東松島市の食材を使ったホットドッグ「ひがまつドッグ」を、協力隊でもつくって販売したんですよね。

佐藤祥　そうそう。うちで収穫したちぢみホウレンソウを使ったホットドッグと、ネギ味噌をマスタード風に添えたホットドッグの2種類。そのネギ味噌のレシピを考えたのが…。

鳥羽　はい。（手を挙げる）

一同（笑）

鳥羽　パンもソーセージも東松島のものにこだわって、全部の食材が主役。その味がシンプルにしっかり伝わるように工夫しました。いいものを使っているんだから相応の価格じゃないと逆に作り手の方に失礼だなと思って、値段もみんなの意見を聞きながら吟味しました。

［上］平山さん
［下］鳥羽シェフ考案。マルシェイベントで好評だった「ひがまつドッグ」。

協力隊が来てくれて変わったこと

Before		After
地域イベントをもっと盛り上げたいと考えていた	▷	地元の食材を活かすレシピ考案で、食のイベントが活性化
生産物の販路拡大が課題	▷	インターネットを通じて多様な可能性を開拓中
都市部からの農業体験ツアーに対応する人手が足りない	▷	隊員がスタッフに回り、きめ細やかなケアを実現

こんなことを実感しています

地元食材を使った美味しい料理をいろいろ知った！

外部から来る人も増え、地域のイベントが盛り上がるようになった

農産物を作った先の"売り方"のヒントをもらった

佐藤祥　昔ながらの安心する味でね。

今関　平山さんが別のイベントで販売していた、ネギの炭火焼きも美味しかったですよね。ロメスコソースっていうスペイン風のピリ辛のソースをつけて食べるやつ。

佐藤みつえ　私たち、本番前のリハーサルでいただけるんですよ。モニターです（笑）

今関　協力隊の方たちのおかげで、そういう地元の農産物を使ったイベントが活性化するのがうれしいですね。農家さんも活気が出てくるし、そういうイベントを通して農家をやりたいなって思ってくれる若い人も出てくると思うんですよ。安心安全な食べ物の良さをどんどん知ってもらって、もっと人が集まるきっかけになったらいいなと思います。

佐藤祥　同じ食材でもいろいろな食べ方や調理の仕方があるんだっていうことを教えてもらいました。協力隊の方々には売り方の面でも期待するところがあるんです。これからは多様な販路を開拓する必要があるし、その点は伊藤さんの得意分野ですよね。

伊藤　僕はWEBの企画制作や運用をする企業さんにお世話になっているんですが、大学で学んだマーケティングの勉強を活かしながら、ネットを使って東松島のいいものを発信していけたらと思っているんです。どういう人たちがサイトを見てくれて、何を解決したいと思っているのかというところからスタートして、じゃあどんなコンテンツを作れば効果的なのかを考えています。インターネットには外の人たちを集める力があるし、東松島の生産者や地場企業と外部の人たちを繋いで、売上や雇用が増えるお手伝いができればいいなと。

佐藤祥　佐藤農園で何かやるとしたら？

伊藤　安価な野菜の場合、ネット販売って価格設定が難しいと思うんですけど、その点、高級志向のデンマーク献上米はいいですよね。無農薬でつくった特別栽培米というコンセプトもしっかりしてますし。

佐藤祥　頼もしいですね。逆に、皆さんから何か思うことはありますか？

鳥羽　30代・40代の人たちの会合は結構あるんですけど、その下の世代の繋がりがまだあまりないので、職種関係なく地域を盛り上げていこうっていう人たちが集まれる機会が増えたらいいな。

渡辺　そうですね、私もいろんな人が気軽に立ち寄れるような居場所づくりをしてみたい。若い人たちも気軽にお茶ができて集まれるような場所があったら、さらに素敵な地域になるんじゃないかと思います。

佐藤農園でつくるササニシキは無農薬の特別栽培米。2年前からデンマーク王室に献上している。

地域が変わった！
助かった！

住民座談会

加美町の場合

加美町旭地区で活動をする地域おこし協力隊、髙橋 巴さん。髙橋さんの和やかな人柄は、地域すべてを巻き込むような大らかさで人と人とを繋いでいきます。その人柄は、この地域にどんな明るさをもたらしたのでしょうか。まるで髙橋さんの旧知の友人のような公民館スタッフの庄司さん、早坂さんからお話を伺いました。

地域に自然に溶け込んでまちの魅力を掘り下げる

早坂　巴（ともえ）ちゃんがこの旭地区に来てくれて変わったことですか？うーん。なんかね、変わったことがないんですよ。だって巴ちゃんって“気づいたらもうそこにいた”みたいな感じなの。違和感なく、自然にこの場所に馴染んでくれていますね。第一印象とかもう忘れちゃったくらい（笑）。でも、確信を持って言えるのは、若い人が来てくれたことで地域の人たちの気持ちが楽しくなっていることですね。それにみんな、気持ちも若返っているんじゃないかな。

庄司　巴ちゃんは公民館で行っているスポーツ教室や料理教室にも参加してくれるんですけど、口数の少ない地域の人たちも彼女には親しみを持って話しているみたいなんですよね。それに巴ちゃんがいることで、積極的に公民館の事業に参加してくれる住民が増えたような気がします。

早坂　時々公民館に来ては、「今日は巴ちゃん来てねえのか？」なんていう人もいるくらいですからね。おやつを持って来てくれる人もいますよ。やっぱり彼女の人柄なんでしょうね。

髙橋　私はこの地域に馴染もうと特別何かをしたわけではないんですけどね（笑）。でも最初はいわゆる“よそ者”なので、どうやって打ち解けられるか心配だったんですよ。地域おこし協力隊って任期があるので、最初からガツガツいかないといけないのかなって思ってもいましたし。でも地域に入ると、「その地域の時間の流れ方」があるんですよね。だからそれに合わせて、時間をかけて関係性を築いていけたらなって思います。

庄司　田舎の人たちって世話好きだけど、最初に慣れるまで時間がかかるんです。でもこれからはみんながもっと彼女の人柄に親しんでいくと思いますよ。

早坂　私たちも最初はやっぱり、どんな人が来るんだろうって思いましたよ。どうやって付き合っていけばいいのかなっていう不安もありました。でも話しているうちに、彼女はノリもいいですしね（笑）。最初に会った時から、特に構えることもなかったですね。

庄司　一緒にお茶も飲むし、一緒にご飯を食べることも多いです。だからもう今ではすっかり仲良くなりましたね。

同じ地域おこし協力隊メンバーと製造・販売している「クロモジ茶」。デザインなど、髙橋さんが素朴でナチュラルなパッケージに仕上げた。

早坂　巴ちゃんのいいところはね、とにかくフットワークが軽い！仕事の取っ掛かりもすごく早いし、そしてすごく機転が利く。誰かにやれって言われる前に素早くやっている姿は素晴らしいし、すごいなと思います。

庄司　巴ちゃんには今この地域の情報を発信する「旭かわら版」を作ってもらっているんですけど、写真も文章もすごく上手！その才能も様々な場面で生かしてほしいなと思うくらいです。この前はかわら版の中の「地域おこし協力隊が勝手に選んだ旭の景色」というコーナーに、私の家のおじいちゃんが植えたヒノキの写真を載せてくれて。私が何気なく話したヒノキの思い出話を覚えていてくれたみたいなんです。

髙橋　会話の中で、“あっ、これいいな”と思ったことはインプットしておこうと思っているんです。この前は、この地域で昔から使われている「竹ざる」の写真も載せたんです。今って使い捨てだったり、安く手に入る商品に目が行きがちだと思うんですよ。でも、「長くつかえるいいもの」も伝えられたらいいかなって思っていて。

早坂　この前は、お地蔵さんの存在を教えてもらいましたよ。毎日その前を通っているのに気づかなかった（笑）。

庄司　そうそう。巴ちゃんからは私たちが今まで気づかなかったことをたくさん教えてもらえますね。

髙橋　だって素晴らしいじゃないですか。昔からこの地域に伝わる風習や今は消えつつある存在になっているものをいろんな世代の人に知ってほしいんです。「地域を元気にしよう！」だなんて、そんな意気込みはないですよ。だって、この地域はもうすでに素晴らしいものを持っていますから。私は“地域おこし協力隊”という肩書きですけど、地域の魅力を起こすというよりはもともとある良さを掘り下げていくくらいがちょうどいいと思っているんです。何かを大きく変えたりしなくても、「あっ、この地域やっぱり好きだ」って地元の方に思ってほしい。そして地元の方だけでなく、この活動を通して旭地区のファンになってくれる方がたくさん増えたらうれしいですね。

庄司　巴ちゃんは私たちがまったく知らない、行ったことのないところに行って魅力を発見してくれますね。これからもやりたいことはいろいろあるでしょうけど、この経験を活かしてもらえたらいいなと思います。

早坂　そうだね。そしていつかはこの地域の住民になってくれたらうれしいかな。

クロモジの木とビニール紐で作った簡易版かんじきは、地域の方に作ってもらったもの。雪まつりで行った「かんじきレース」で使用した。

協力隊が来てくれて変わったこと

Before		After
幅広い世代が集まる交流の場が少ない	▷	交流が増えて地域の人々が元気に！
魅力に欠けると思っていた田舎暮らし	▷	新しい視点から魅力を掘り出し地域力アップ
地域の情報を上手に発信できない	▷	目を引くデザインのかわら版で多くの人に情報を届けられる

こんなことを実感しています

巴ちゃんが来てくれて、
地域の行事に
参加してくれる人が増えた

巴ちゃんからは
私たちが気づかなかった
地域の良さを教えてもらえる

自分から地域に飛び込んで
溶け込む姿勢に元気をもらえる
加美町旭地区公民館 館長 髙橋福継さん